

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520179

研究課題名（和文） 読経道の復元的研究—中世における宗教・芸能・文学の関係を視座として—

研究課題名（英文） A Study of the restoration of *Dokyo-do*(Way of Chanting the Lotus Sutra) —From viewpoints of religion, literature, and performing arts in the medieval ages

研究代表者

柴 佳世乃 (SHIBA KAYONO)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：90343087

研究成果の概要（和文）：日本中世における宗教と芸道および文学との関係について、〈読経道〉を中心として考究し、特にその音楽的側面について明らかにした。読経道の口伝書における「読経音曲」に関わる言説を翻刻し、解説を行った。読経音曲の骨格が明らかとなり、唱導や平曲と密接な関わりが認められるに至った。また、新たな読経道テキストが見いだされ、併せて書写山や四天王寺などの、口伝継承・伝承生成の場の存在が具体的に確かめられた。

研究成果の概要（英文）： This is a study of the restoration of *Hoke-kyo* chanting and its cultural significance during the medieval ages. In this study, I pursuit the cultural significance of *Dokyo-do*(Way of Chanting the Lotus Sutra) from the viewpoint of literature, religion, and performing arts. Particularly, It is focused on the music method of *Hoke-kyo* chanting —*Dokyo-Ongyoku*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世文学・仏教

1. 研究開始当初の背景

仏教の儀礼・法会などを通して、貴族社会にも浸透していた読経は、高度に洗練されていた。特に宗派を超えて広汎に読まれた『法華経』は、音曲における秘説化を伴って、平安末期から鎌倉初期にかけて芸道としてかたちを整えた。それを読経道という。読経道は、正確な字音の読み、すなわち〈字声〉〈清濁〉と〈音曲〉という3本の柱から成るものである。読経はかつて、体系的な口伝に

支えられた、極めて音楽的な芸道として在ったのである。

読経には様々な系譜や説話伝承が存し、僧俗にわたる多彩な人物が関わっている。そもそも宗教的行いであった読経が、僧俗を巻き込んで芸道化した背景には、王権の密接な関与が認められる。また、読経道の口伝書は、本来かたちを持たないはずの音声を書き留めようとする意志に満ちており、〈音声の書記化〉という営為を具さに何うことができる。

読経道は、その文化史的意義の大きさにも

拘わらず、関連諸資料の総合的な読解や位置づけが十分になされなかったために、従来は体系的に論じられることがなかった。個別적으로는、国語学の分野から、字音の資料としての法華経読誦に関する研究の蓄積があり（『本邦辞書史論叢』〈三省堂、1967年〉、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』〈汲古書院、1997年〉他）、また近年、文学からも能読の人物たちの検証や、王権や時の文化と絡めた論究が為されている（清水眞澄「能読の世界—後白河院とその近臣を中心に—」『國學院雑誌』1997年4月）他）。申請者は、そのような状況の下、主として文学研究の立場から、資料の発掘とその読み解きを通じて、読経道の形成と展開に関する大まかな見取り図を示した。柴『読経道の研究』（風間書房、2004年）がそれである。その存在と概要が明らかとなって、まさに今、本格的な研究がなされる段階を迎えたと言ってよいだろう。

本研究は、読経道の全体像と文化史的意義の解明を視野に入れつつ、これまでほとんど本格的な研究がなされたことのない〈読経音曲〉に焦点を当てる。口伝書に記されている音曲条（文章および譜より成る）の解読を行い、法華経はいかに読誦されたか、について具体的に究明する。読経道、ひいては中世の音声文化を考える上で、その芸態そのものの解明なくしては全容を見渡すことができないと思うに至ったからである。

2. 研究の目的

本研究は、日本中世における宗教と芸道および文学との関係について、〈読経道〉を中心として考究するものである。〈読経道〉とは、法華経読誦が秘事口伝を伴って、古代末期から中世にかけて芸道としてかたちを成したものである。近年の研究によって読経道の存在はようやく知られるようになったが、芸態としての実態はほとんど明らかになっていない。そこで本研究は、特に読経道の音曲的側面に注目し、一次資料の収集と解読を通じて〈読経音曲〉の解明を目指す。読経道そのものが既に途絶えてしまった今、実際にどのように読誦されたかは直接には知り得ない。残された譜がいかなる音階・曲調を示しているのか等々、譜や口伝書を徹底して集積し、声明をはじめとする周辺諸芸態との比較検討によって解析することによって、その芸態を復元する。最終的には、音声による読経音曲の復元を試みる。また併せて、その文化史的意義を明らかにする。読経道は、王権が絡んで僧俗の宗教文化のなかでひろく行われたために、諸芸能・文化の交差するところに存していると考えられる。この芸能を具

体的に解明することは、中世全体の芸能文化・文学歴史研究に一石を投ずるはずである。

読経道の実態を解明することを通して、読経から広がった中世の音声文化の特質について広範な検討を加え、その包括的な姿を提示することが、申請者の研究の全体構想である。本研究は、特にその芸態について、実証的方法に基づいて復元することを主軸とする。

3. 研究の方法

中世の読経道の実態を解明するために、次のような3本の柱を立てる。すなわち、

(1) 〈読経音曲〉の解明—中世に『法華経』はいかに読誦されたか。

(2) その芸能的特色が、他の芸能・音楽とどのように連動しているか。

(3) 読経音曲がどのような場で、どのような人々によって行われたか。

である。具体的に調査研究を行うことにより、本研究ではこの3点について究明する。

(1) については、読経の口伝書や譜を丹念に調査し、読み解くことによって、読経音曲を解明する。読経の口伝書の中に見える、芸態に関する記述を詳細に読み解くことに加え、複数残されている読経音曲の譜（多くは『法華経』経文に博士譜が付されたものである）を集積し分析する。以下の(2)の作業と関わらせながら読経音曲の復元を進める。

(2) については、(1)の作業に基づきつつ、読経が他の芸能とどのように相互に関わりを持つかを具体的に検証する。幅広く行われた読経だけに（しかも政治文化の中核が深く関与し形成された芸能である）、唱導や声明などの他の仏教音楽や、周辺の芸能と密接に関わっていることが予測されるので、その具体相を明らかにする。すなわち、細かな声の出し方の作法について、声明をはじめとする仏教音楽、唱導、雅楽、平曲などとの大小様々に及ぶ関わりの様相を、明らかにする。その際に用いる資料の範囲は、おのおのの口伝書（楽書などを含む）を中心として、説話や記録類にも及ぼす。

(3) については、平安末～鎌倉期の都、南北朝～室町の書写山（播磨）、室町後期の南都（特に東大寺・薬師寺）という3つの重要な「場」が存すると考えられる。それぞれの場がいかに関わり、読経のトポスとなっていたのかについて、具体的資料に基づいて考究する。「法会」という仏教儀式における読経音曲の役割についても検証する。

以上の点を通じ、文学・宗教・芸能における読経道の文化史的意義を明らかにする。

4. 研究成果

本研究は、日本中世における宗教と芸道および文学との関係について、〈読経道〉を中心として考究するものである。一次資料の収集と解説を通じて〈読経音曲〉の解明を目指し、文学・宗教・芸能における読経道の文化史的意義を明らかにすることを目的として研究を行った。特に、これまで顧みられることのなかった読経の音曲的側面に焦点を当て、その体系と、他芸能—平曲や唱導との関わりを明らかにした。また、資料調査・解説の過程で新たな読経道の口伝書が複数見いだされ、併せて書写山や四天王寺などの、口伝継承・伝承生成の場の存在が具体的に確かめられた。

読経道の復元をめざす本研究を通じて明らかになったことは、主として次の3点である。

(1) 読経道に関するテキストの新たな発見……読経道の口伝書を、あらたに2点見だし、それぞれの内容を分析、解説した。

(2) 読経音曲の解明……読経道口伝書類に表される〈読経音曲〉に関する言説を解説することによって、中世における法華経の歌唱の実態に迫った。また、周辺芸能、特に唱導・平曲との具体的な関わりが明らかになった。

(3) 読経道が伝承される場の解明……読経道伝承がいかにかに生まれ、いかにかに広まったか。あるいは、読経道そのものはいかに継承されたか。これらを考究し、書写山や四天王寺などの、口伝継承・伝承生成の場の存在が具体的に確かめられた。

この3点について、以下、具体的に成果を報告する。

(1) 読経道テキストについて

読経道の根幹資料である『読経口伝明鏡集』の、学界未紹介の2本を見出した。読経道に関わるテキストは、未だ各寺院や文庫などに所蔵されたまま知られぬものがあると予想され、その全体像が描きにくい。そのような現状において、『読経口伝明鏡集』の諸本を考える上で重要な2本が発見されたのは、大きな成果であった。

①六所家蔵東泉院本『読経口伝明鏡集』…本書は、富士市立博物館所蔵の六所家資料中の一書である。内容から見て、これまで知られた諸本のうち「永正本」系統に属する本である。音曲条が省略されており、実用的に流布した字音の書としての側面が際立つ。また併せて、これが、修験道などとも関わる真言系の仏教寺院に伝わったものであることも重要である(柴「六所家蔵東泉院本『読経口伝明鏡集』について」富士市立博物館『六所家総合調査だより』6号、pp.6~9、2010年3月)。

②弥勒寺蔵『読経口伝明鏡集』…美濃の弥勒寺(岐阜県関市)に所蔵される、円空書写の『読経口伝明鏡集』である。内容から、①の東泉本と同様、永正本系統の本と判明する。奥書に書写山伝来の記述があり、『明鏡集』に続けて『法華経声事』なる、書写山における法華経字声および音曲に関わる書が付される。書写山という宗教的磁場を解明するにあたって、重要な本と位置づけられる(柴「弥勒寺蔵『読経口伝明鏡集』『法華経声事』解題と翻刻—書写山伝来と円空書写をめぐる—」、千葉大学『人文研究』41号、pp.205~240、2012年3月)。

(2) 読経音曲の解明について

読経音曲について解明するために、次のような観点を立てた。

①音曲の構成…どのような構成で唱われたか。「四句甲乙」「叩」「乱句」の意味。

②詞章…法華経のどの部分が音曲として唱われたか。

③曲節…どのような曲節(フシ)であったか。

④読経の作法および心得…細かな声の出し方がどのようなものであったか。

上記の問題意識に基づき、ひとつひとつを解明するべく論究を行った。読経音曲を解明するに基本となるのは、『読経口伝明鏡集』の音曲条である。あらためてそのことを確認し、その全条を翻刻した(柴「読経道の音曲—法会における音曲の解明に向けて—」『巡礼記研究』第九集、近刊。骨子部分は、学会発表：柴「読経道の音曲について」、巡礼記研究会、於金沢文庫、2011年10月23日にて既に公表している)。読経音曲の骨格、すなわち「四句甲乙」と呼ばれる音曲の作法が浮かび上がった。また、時代による変化変容が存することも見えてきた。本論文では、①音曲の構成、および③曲節について考察を加えたが、加えて、個別の音曲作法については、柴「平曲と読経道—書写山をめぐる—」(『磯水絵還暦記念論集』共著、和泉書院、2013年5月予定)においても論じている。ここでは、読経音曲を構成する「叩」という技法について、掘り下げた。

②詞章については、『法華経』のどの部分もが音曲読みになされた可能性が明らかとなった。現存する口伝書諸本において、譜が付されている箇所をすべて、『法華経』に照合して検討する作業を通じて導かれた結果である。『法華経』の長行(散文部分)・偈(韻文部分)のいずれもが、音曲として唱われたのである(ただし、次第に唱えられる箇所が定まっていっていった可能性はある)。この点は、柴「読経道と読経音曲—読経音曲の復元に向けて—」(藤田隆則・上野正章編『歌と語りの言葉とふしの研究』共著、京都市立芸術大

学 日本伝統音楽研究センター、2012年3月、pp. 39~61) に詳しく論じた。

以上、読経音曲そのものの解明を試みたが、これまで全く分からなかったその芸態が、どのような体系と特色を持つものであったかが少しずつ明らかとなった。どのような場で、どのように唱われたかという点についても検討を加え、法会における唱導の音曲の要素と連動するものであるとの手がかりも得た(柴「読経道の音曲」)。

(3) 読経道が伝承される場の解明について

読経道は、平安末期から鎌倉初期にかけての都においてかたちを成したと考えられるが、その後、この芸道は、どのように展開していったであろうか。また、法会をはじめとして宗教儀礼の中でどのような位相にあるだろうか。これらの点についても論及を行った。

まず、読経道が行われた場として看過できないのが、播磨の書写山円教寺である。読経道の根幹的なテキスト『読経口伝明鏡集』が書写山にて複数書写されていること、また書写山独自の読経音曲に関わるテキストが制作されていることが、このたびの研究でより立体的に明らかとなった(前掲「弥勒寺蔵『読経口伝明鏡集』『法華経声事』解題と翻刻—書写山伝来と円空書写をめぐる—」)。その書写山には、琵琶法師の中興の祖と云われる覚一が書写山あがりの僧であるとの伝承がある。平曲(平家語り)と読経音曲との関わりにも具体的に目を配りつつ、平曲(ないし平家物語、読経)と書写山との密接な関係を論じた(柴「平曲と読経道—書写山をめぐる—」『磯水絵遷暦記念論集』(共著、和泉書院、pp. 163~186、2013年5月予定)。書写山という宗教的磁場が、読経道を担い、あらたに独自の読経音曲を育み隆盛に及んだことを明らかにし、果てには平曲とも音曲面で関係した可能性を論じた。

また、読経道伝承が留まり、生成する場として、四天王寺(現大阪市)は重要である。無住の『沙石集』収載話の検討を通じて、四天王寺別当であった永覚らの事績を辿りつつ、四天王寺が読経道にとってどのような場であったかを考究した(柴『沙石集』の道命和泉式部説話—読経道伝承から読み解く—、長母寺開山無住和尚七百年遠諱記念論集刊行会編『無住—研究と資料』共著、あるむ、pp. 287~310、2011年12月)。無住は、読経道の展開期たる鎌倉後期に生き、その広汎な取材で得た読経道伝承を書き留めたと考えられる。道命と和泉式部という読経道伝承における興味深い組み合わせが、永覚周辺に発する可能性もあろう。

さて、こうして本研究では、読経音曲の解

明を軸に、読経道の文化史的位相を考究した。これまで未解明の中世の音曲の様相が、読経を基軸に新たなる視点で明らかになりつつある。研究分野を超えて、歴史学や音楽学、宗教文化史などの紐帯が密になり、相互に具体的な議論が可能な段階となった。

もとより読経道に関わる書物は未だ知られぬものもあり、それらを調査・解読しつつ研究を進めることが求められよう。また、その音楽的特徴、芸態については、本研究を通じて一定の成果が得られたが、これをもとに、より精緻に〈読経音曲〉を復元することが次なる大きな課題である。平曲や唱導との芸能的交差が具体的に見出せたので、さらに範囲を広げた枠組みで考究したい。仏教儀礼や社会のなかで読経道がいかなる位置にあったのかをより鮮明に描き出すことは、中世の芸能と宗教の様相を、より具体的に探ることにつながるはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 柴佳世乃「読経道の音曲——法会における音曲の解明に向けて——」(『巡礼記研究』第九集、近刊)
- ② 柴佳世乃「弥勒寺蔵『読経口伝明鏡集』『法華経声事』解題と翻刻——書写山伝来と円空書写をめぐる——」(千葉大学『人文研究』41号、pp.205~240、2012年3月)
- ③ 柴佳世乃「融通念仏縁起をよむ——良忍像・良忍房に着目して——」(科学研究費報告書『「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究—日本中世の文学・絵巻から—』pp.146~149、2010年3月)
- ④ 柴佳世乃「誓願寺縁起絵をよむ——掛幅『縁起絵』と一卷本『真縁起』の関係を中心に——」(科学研究費報告書『「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究—日本中世の文学・絵巻から—』pp.92~96、2010年3月)
- ⑤ 柴佳世乃・戸波智子「慶政と園城寺——慶政『三井寺興乗院等事』『大師御作霊像日記』を読む——」(千葉大学『人文研究』39号、2010年3月)
- ⑥ 柴佳世乃「六所家蔵東泉院本『読経口伝明鏡集』について」(富士市立博物館『六所家総合調査だより』6号、pp.6~9、2010年3月)

[学会発表] (計5件)

- ① 柴佳世乃「読経の音曲——その芸態と歴

- 史的展開——」(学会発表、名古屋大学大学院比較人文学先端研究特別演習 公開研究集会、2012年12月22日)
- ② 柴佳世乃「読経道と書写山」(講演、書写山円教寺開山堂落慶法要 記念講演会、2012年4月10日、於書写山円教寺)
- ③ 柴佳世乃「読経道の音曲について」(学会発表、巡礼記研究会、於金沢文庫、2011年10月23日)
- ④ 柴佳世乃「『沙石集』の道命和泉式部説話——読経道伝承から読み解く——」(学会発表、名古屋大学比較人文学先端研究公開研究集会「無住—その思想とテキストをめぐって—」2010年12月24日 於名古屋大学)
- ⑤ 柴佳世乃「読経道と法華経音曲」(講演、2010年8月10日、姫路ロータリークラブ)

〔図書〕(計3件)

- ① 『磯水絵還暦記念論集』(共著、和泉書院、2013年5月予定)、柴佳世乃「平曲と読経道——書写山をめぐって——」(pp.163~186)
- ② 藤田隆則・上野正章編『歌と語りの言葉とふしの研究』(共著、京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター、2012年3月)、柴佳世乃「読経道と読経音曲——読経音曲の復元に向けて——」(pp.39~61)
- ③ 長母寺開山無住和尚七百年遠諱記念論集刊行会編『無住——研究と資料』(共著、あるむ、2011年12月)、柴佳世乃「『沙石集』の道命和泉式部説話——読経道伝承から読み解く——」(pp.287~310)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者
柴 佳世乃 (SHIBA KAYONO)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：90343087

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし